

第1部

マッキーの物語

～個人ボランティア編～

第1部では、個人ボランティアとして参加した青年「マッキー」が見た救援活動の実状を通して、これからのボランティアの課題を考えていきたいと思います。



平穏な人々の暮らしを突如、奪い去った未曾有の大地震に、全国から何万、何十万という個人ボランティアが被災地へ駆けつけました。

大勢のボランティアを被災地へ向かわせたのは、「苦しんでいる人たちの役に立ちたい」という善意だったのは間違いありません。一人一人の動きは小さくても、まとまった力が救援・復興活動に大きく貢献したのは誰もが認めるところで、「ボランティア元年」とまでいわれました。

しかし、「善意」は常に活かされるとは限りません。思いだけが先走り、被災者の感情とのすれ違いを生む。仲間であるボランティアたちとの意見の食い違いは、時に活動の足を引っ張る。こうした事実は、大きな反省点として受け止めなければなりません。

※各章の物語は、阪神・淡路大震災におけるボランティア活動の検証をもとに構成された架空の物語です。



「マッキー」
本名、植野進、栃木県在住、
新婚1年目の29歳。
日川雑貨品販売のチェーン店に勤める。

STORY 1 行くべきか、行けるのか

行きたい。でも、
行ってもじやまになるだけかも……。
マッキーはなかなか決断がつきません。



「マッキー、大変!」。1995年1月17日朝。マッキーこと槇野進は、妻の大声で目を覚ました。「早く、こっちへ来て!」。眠い目をこすりながら、リビングに出てきたマッキーが目にしたのは、無惨に崩れ落ちた街の映像だった。1週間が過ぎ、マッキーの職場でも募金と救援物資の提供が始まった。テレビでは、全国から被災地に駆けつけるボランティアの活動が、連日紹介されていた。「自分にも何かできないだろうか」。黙々と働く彼らの姿を見るたび、マッキーは突き動かされるような思いにかられた。自分には医療知識も土木技術もない。ボランティアの経験もない。「素人の衝動的なボランティアは困る。救援活動の邪魔にさえなる」。プロのボランティアという男たちがテレビで繰り返すのを聞いた。「行っても足手まといでは…」。

気持ちがなえる。妻や職場のこともあった。自分に万一のことがあったら…。休暇はどのくらいもらえるのか…。どこへ、どうやって行けば…。何を持って行けば…。迷いの中で2週間目が終わろうとしていた。



- ①●迷い続けるマッキーに何かアドバイスをしてあげるとしたら、あなたは何か言ってあげますか。
②●被災地行きを決断した場合、マッキーが出発までにどんな準備をすればよいのでしょうか。
③●被災地行きを断念しなければならなくなった場合、マッキーはどこで何をすればよいと思いますか。



◆解説と提言

桑山克己(A-yan Tokyo/えーやん とうきょう)

●妻田区、兵庫区のボランティア拠点団体でボランティアコーディネーター、避難所イベントボランティア、仮設住宅訪問、引っ越しの手伝いなどを行う。

見る前に跳べ。動きの中で考えよ。 そしてまた跳べ。

「行きたい。でも行くべきか？」誰もが自問した。マスコミが伝える情報は一面的であり、無意識ではあるが、「事実」に報道者の思いが混ざってしまう。自分にとっての「事実」は自分で「見る」ことでしか得られない。冒頭の自問への回答は単純である。「見る前に跳べ」だ。まず動いてみる。その動きの中で考える。「行くべきでなかった」と判断すればその時点で「帰れ」ばよい。例え帰ったとしても、「動いた」ことでしか見えなかった新たな視点を獲得する。

次の問題は「行けるのか？」であった。これを「本当に行けないのか？」に変えてみる。行けない理由、障害を具体的に上げてみる。すると、「思い込みの大きさ」がはっきりしてくる。例えば「サラリーマンが一週間も休めない」は周囲の

理解、援助で「一週間くらい休める」に変化する。こうして障害を一つずつ見つめ直していくと「行ける」自分に気が付く。

では、障害がどうしても取り除けない場合はどうだろうか。ここで重要なのは「行けない」と「何もできない」が全く異なるという認識である。「行ける・行けない」の二元論から、「制約の中でできること」への多元論へ。「行けなかった」というネガティブな評価を、「行かないことで可能になったボランティア」というポジティブな発想に転換してみる。事実、被災地外の募金、支援物資の整理や送付、広報等々、後方支援でしかできない事は沢山ある。皆が被災地に行くことが重要ではない。皆が被災地に思いを馳せて行動することが実は一番大切である。

◆一コラム

慎進(とちぎボランティアネットワーク)

●東灘区中野南公園テント村、須磨区ゆいぽーるこつべを支援。栃木県から数万羽の折り鶴を送った男。

ボランティアをするための3つの条件

ボランティアをするためには、3つの条件がそろふことが必要だと僕は思います。その3つとは、勇気、仕事、お金です。阪神大震災の時、僕が被災地に行くことができたのはその3つがそろったおかげでした。

まず「勇気」ですが、ボランティアをしたいという純粋な気持ちが必要です。面倒だとか余計なお世話だとかマイナス思考に負けないで、最初にボランティアをしたいと思った勇気をずっと持ち続けられるかどうかです。

次に「仕事」ですが、現地で働くには仕事を休まないといけません。有給休暇をとることができるかどうかや、職場の理解などもボランティアをするために必要です。

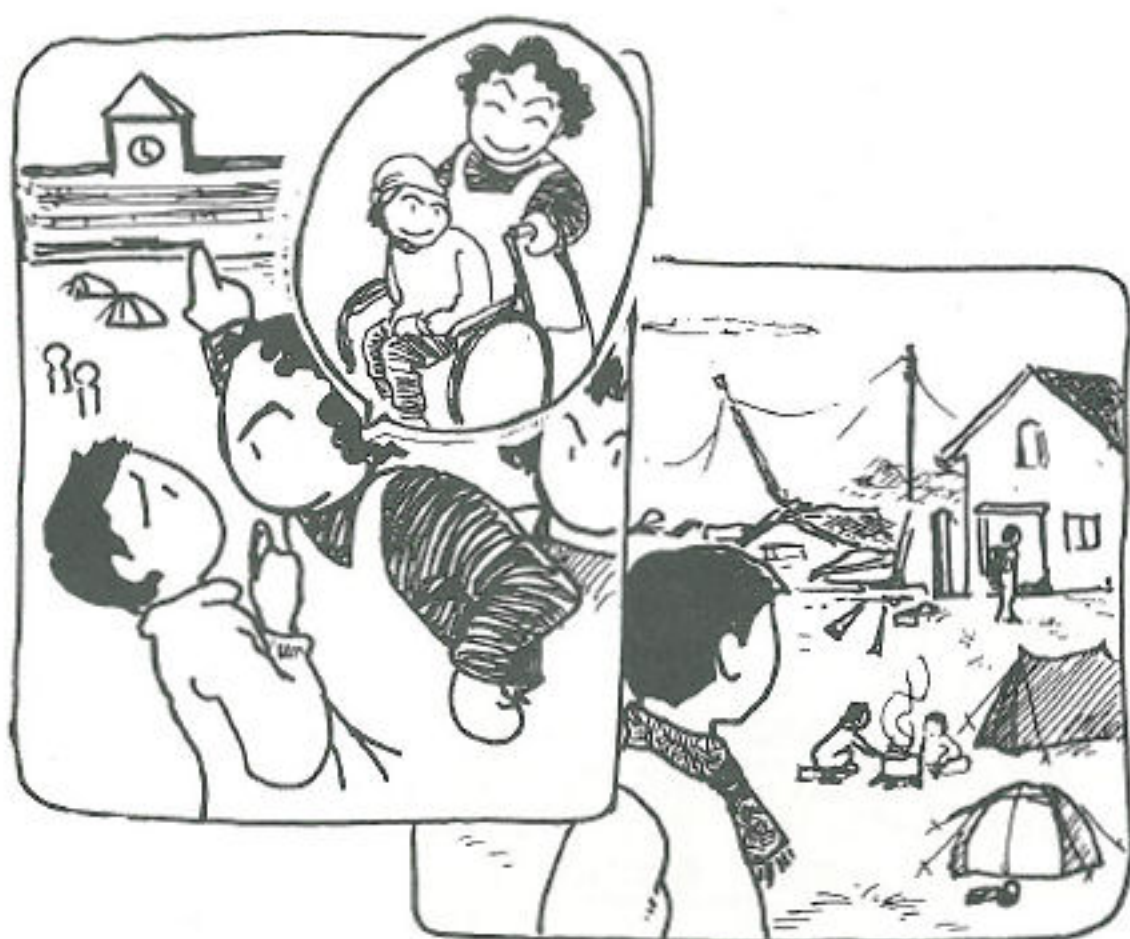


●瓦礫の中で遊ぶ。

最後に「お金」ですが、ボランティアをするためにはお金が必要です。お財布の中にそのためのお金が入っていますか。ボランティアとは己の生活を犠牲にして自分を捧げる行為ではないと思います。

それでも、「ボランティアをしたい。困っている人の何かの役に立ちたい」と思ったピュアな心が、その3つの中で一番大切なことだと僕は思います。

自分は小さな点に過ぎない。
何ができるのかという問いが、
頭の中を駆けめぐりました。



マッキーは妻と上司を説得して、地元の民間団体が募集した10日間の派遣ボランティアに参加した。派遣先は、灘区の障害者施設。ところが出発後に、行き先が長田区の避難所に突然、変更になった。施設のボランティアの数が余り、これ以上受け入れられないという理由だった。ボランティア受入れの説明会が始まるまで、マッキーは避難所になっている中学校の周辺を歩いてみた。被災地の広さと、被害の差に驚いた。木造住宅がペシャンコになってつぶれている向こうに、傾いたマンション、崩れたコンクリートから鉄筋がむき出しになったビルが見えた。そうした建物の間にまったく無傷の家があり、テントが並ぶ公園があり、人々の生活があった。そんな風景が、延々と続いていた。テレビに映し出された、倒れた高速道路や焼け野原の光景ばかりではない現実。思い描いていた被災地との

間には大きなズレがあった。マッキーは、何かに追われるように避難所に戻る道を急いだ。



- ①●向かっていた活動先が急に変更になったら、あなたはどう感じますか。
- ②●“被災地”と聞いてあなたはどんな情景を思い浮かべますか。
- ③●避難所に戻るとマッキーはどんなことを思っていたのでしょうか。



◆解説と提言

鈴木隆太(被災地NGO協働センター)

●震災当初は六甲小学校避難所(神戸市灘区)で活動。
95年8月より阪神大震災地元NGO救援連絡会議・仮設住宅支援連絡会(現:被災地NGO協働センター)スタッフ。

肩の力をぬいて

避難所に入って、緊張感と使命感が高まる。回りを見渡すと、右往左往する避難者の方々、ボランティア、犬、猫……。その中で何故か取り残されている錯覚に陥る。「何かしなくては、ボランティアをしなければ」焦れば焦るほど何も手に付かない。ため息混じりで避難所となっている小学校のグラウンドにいと、ひとりのおばちゃんがつかつかと近寄ってきた。

「どないしたん、浮かない顔して。ボランティアやったらしゃきっとせんかい！」といきなり一喝。そのおばちゃんの家も全壊で避難生活を送っていた。そんな中、“ボランティア”に対して逆に声をかけてきてくれた。情けないやら嬉しいやら、何とも言えない感じだった。

「別にボランティアやからって、何も気負いせんでええ。自分のやれることをその日一回でもやれたと思えればそれでええ。よく言うやろ、『一日一善』で。それやで、それ。」何かが吹っ切れた。

自分の思い、自分の根拠のない使命感。それよりもまず目の前に人がいる。何を優先するのか。それは人の気持ち、阪神淡路大震災というならば「被災者の方々」の気持ちではないだろうか。自分の思いより、まず人の気持ちを大切に。そんな中に身を置いてとりあえずやってみよう。それからでも自分の中で軌道修正は出来るのだから。

◆一コラム | ボランティアの声 Part 1

～わたしが経験した思いと現実のズレ～

震災直後から神戸市兵庫区須佐野公園を中心に小規模避難所への物資配送や避難所に入らない在宅のお年寄りの訪問、避難所から仮設住宅への引っ越し、仮設住宅訪問などを行っていた「ちびくろ救援ぐるうぶ」(97年4月より「ぐるうぶ・えん」)のみなさんにお話をうかがいました。

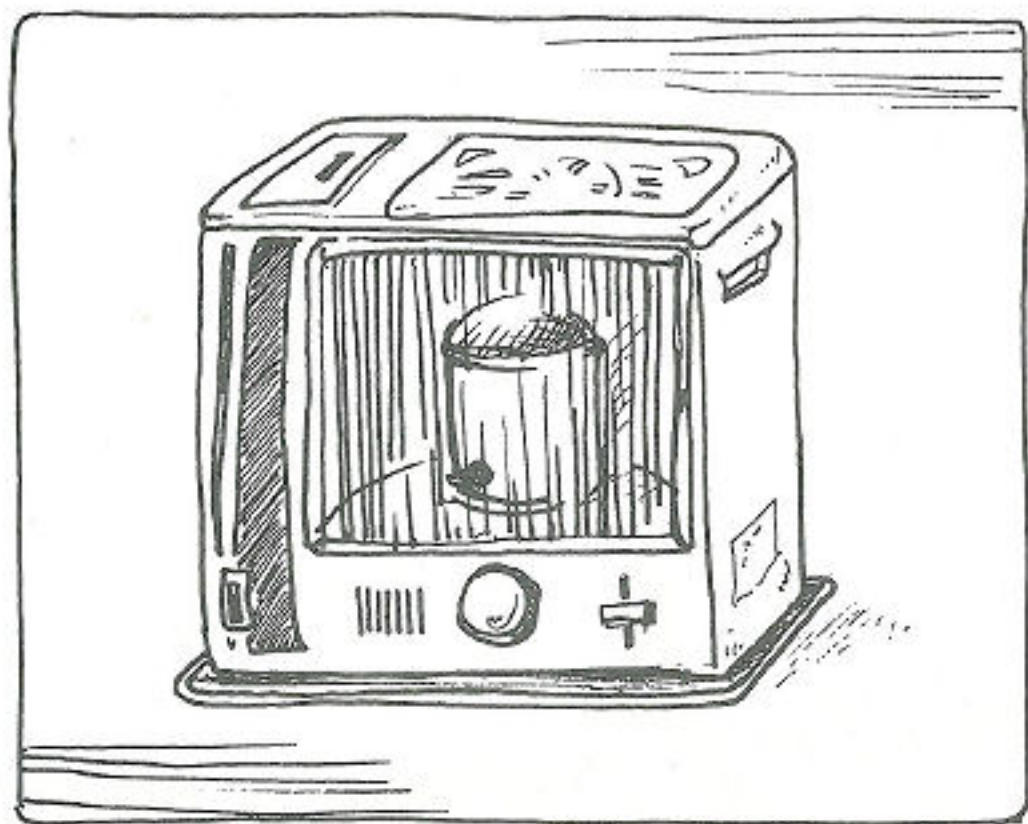


●「想像を絶した。テレビで家の片づけとかよく映っていたからそういうことやるのかと思っていたら、実際に来てみたら崩れた家の柱とかを薪にしたりしていて、すごかったなと。避難所で炊き出しとか行ったけど、実際に見ると生々しいというか、住んでる人は大変やろなと思った」 / 高須賀裕清さん



●灘区JR六甲駅北側

●「生活用品や、金銭や、心の面で、被災者側の身になりきれない自分。今までの被災者の状態とこれからの被災者の状態のことは、こちらが考えていた以上に繊細だった。映像やマスコミ、自分の経験を基にした勝手な意識と、現実の状況との違いを感じた。年齢からくる意識の違いが、被災者と私、他のボランティアと私の両方にあった」 / 本多樹一さん



良かれと思ってしたこと、
厳しく注意されたマッキー。
リーダーの言葉には
納得がいかなかったようですが…。

「そういう勝手なことをされると困るんです」。厳しい口調で、物資担当のボランティアリーダーがとがめた。避難所に到着した日の午後、マッキーは救援物資の整理を担当していた。物資置場にあった石油ストーブと鍋を、避難所の外から来た被災者に渡してしまったのだ。「ここにある物は、この人達に優先的に配るんです」とリーダーは言った。「しかし、現に彼らは困っていたんですよ。それに、指示を待たないで自分で判断して行動してくれ、と言ったのはあなた方じゃないですか」。マッキーは、避難所を聖域視するリーダーの言葉に納得がいかなかった。しかし、リーダーは「常識で考えてくださいよ。だいたい、あのストーブはあなたの物じゃないでしょう。特別なことをする時は、本部に相談してください。でないと、秩序が守れないんだ」と吐き捨てるように言って立ち去った。マッキーは夜の校庭に出た。車があり、テントがあり、ブルーシートの小屋があっ

た。隅には、泣きじゃくる子どもを抱いた若い母親の姿もあった。何を言われても今は我慢するべきだろう。自分をそう納得させた。



- ①●あなたがマッキーだったら避難所の外から来た被災者にどう対応しますか。
②●あなたはリーダーの言葉や考え方をどう思いますか。
③●“今は我慢するべきだろう”というマッキーの心のつぶやきをどう思いますか。



◆解説と提言

植山利昭(川崎・災害ボランティアネットワーク会議/代表)

●震災当時、両親が西宮市のJR「甲子園口」付近に住んでいたため、地震発生一週間後にJR再開と同時に西宮へ。3/25に「川崎・災害ボランティアネットワークをつくる会」を結成。その後、長田区を中心に数回神戸に。

相談、気配り、そして努力

救援物資の分配に関しては、基本的には、自分だけで判断するのではなく避難所の各リーダーたちと相談する姿勢が大切です。誰がリーダーなのかははっきりしていない、災害発生直後の混乱期であれば、集まった人たちで相談しながら、できるだけ早い時期にいくつかのルールをつくる必要があるでしょう。避難所での活動では、避難所に来れない周辺の人々への配慮も必要です。特に、「災害弱者」といわれる障害者・高齢者・外国人などに対して。一定の期間が過ぎてから避難所などに入る場合には、リーダーとボランティア間の連携はもちろん、避難所の現状をいかに早く把握するかどうか、が問われます。

また、ボランティアリーダーとしてはボランティアに来ている人たちに気持ちよく働いてもらえるような配慮が必要です。ひとりひとりのボランティアにとっては、自分の持ち場で誰が

何をどんな責任を持って担当しているのか、が明らかになっていることが重要です。それがわからないと、連絡や相談などのコミュニケーションも曖昧でしかなくなってしまいます。

大切にしたいことは、いかにしてボランティア同士のコミュニケーションを深めるか、いかにして地域住民との連携を計るか、というひとりひとりの気配りと努力です。



●教室にも人が住んだ

◆一コラム

永井美佳(大阪ボランティア協会)

●震災当時は西宮市、芦屋市、神戸市東灘区を中心に「阪神淡路大震災・被災地の人々を応援する市民の会」でボランティアコーディネーターとして活動。

求められるものは何か？

災害などの緊急時にはボランティアへのお膳立てが難しいため、ボランティアの自発性を信頼して判断を委ねることが多くなる。しかし、活動期間が短かったり関わり方が一面的なボランティアの場合、個々が全体の状況を的確に把握することは難しい。そのため、ボランティアが良かれと思って下した「自発的な自己判断」と活動の場の「判断基準」に差が出ることもあり、結果、戸惑いや葛藤が生じてさまざまな思いが交錯することになる。

また活動現場では、危険を伴う活動にどこまで対応するかや便利屋的感覚でのボランティア依頼にどう対処するか、謝礼など依頼者の感謝

の意をどう受けとめるか等について、次々と判断を要することが押しよせる。組織に所属して活動する場合、「ボランティアはどこまで活動するのか」について一定のルールがあるにせよ、最終判断は個々のボランティアに委ねられることが多い。

こうすれば絶対正解というマニュアルも答えもないのが災害時の活動現場だ。その中でできる限り最良の選択をするためには、平時から「状況判断力」を意識的に鍛えることが大切となる。真のニーズを「把握する力」、結果を見通す「想像力」そして状況に合わせた「バランス感覚」を備えることが状況判断力向上の鍵だと言える。

混乱の中、被災者もボランティアも心の余裕をなくしたようです。



「おまえ、被災者をなめとんのか!」。荒れた声が、人であふれた体育館に響きわたった。救援物資の衣類を配り終えた直後のことだった。中年の男がボランティアの学生にビニール袋に入った下着を突きつけていた。「なめてなんかいませんよ」。学生が応じた。「なら、謝ったらどうや。こんなもん渡しよって」。男は袋を逆さにした。出てきたのはシミのついた下着だった。「だから新しいのと取り替えますよ。どれでも好きなものを持っていってください」。「なんやと」。つかみかかろうとする男を周囲の何人かが押さえた。「謝れって言われたって無理ですよ。ほくたちはただ配ってるだけで、自分で仕分けしたわけじゃないし、配るときにいちいち調べてるヒマなんてないんだから」。駆けつけてきた本部の責任者が、仕分け担当者によく言っておくからと謝って、男に引き取ってもらった。被災した人たちと同様、混乱の中で自分たちもまた余裕をなくし、疲れ切っている。

それでも、もう少し言い方があるだろうとマッキーは思った。



- ①●あなたがこの学生だったら、怒りをあらわにする男性にどう対応しますか。
 ②●余裕をなくして感情的になったとき、あなたはどのようながよいと思いますか。
 ③●お互いにストレスを残さずにこつた問題を解決するにはどうすればよいと思いますか。



◆解説と提言

山根修一(共働作業所シティライト)

●震災直後は、兵庫区の高齢者の避難所への搬送を応援し、共働作業所は一時仮避難所に。その後、作業所のメンバーらと荒田仮設住宅のふれあいセンターの立ち上げ、同協会の運営に協力している。

やり場のない怒り、いらだちを理解する

毎日続くパックの弁当、交通の便の悪いところではそれさえも遅れがちになる。被災者の好みや食べたい量に関係なく配給される冷たく、時には少し堅くさえなっているこの弁当に不満が募っていた。高齢の方からは「むしろ柔らかいからパンの方が食べやすいんです」と言われ、電子レンジでチンしてあげることができたらしいのになあ、と思ったものだ。

しかし、本当のいらだちは弁当から来ているのではない。いつ終わるとも知れない避難所の非人間的な生活—プライバシーがない、お風呂がない、着替えも充分でない、寒い、医薬品が…等々、被災前の生活とのあまりの落差にストレスが蓄積されていった。

また、住居のこと、仕事のこと、子どもの教育のこと等、ほとんどの人が避難所のとりあえずの生活より、生活再建、自立への具体的な支

援策の提示を行政に求めていた。それがなかなか叶わず、断片的に伝わってくる対策が自分たちの望みとはかけ離れていると知ったとき、多くの被災者が無力感にさいなまれ、やり場のない怒りを抱えた。肉親を亡くした人、けが人を抱えた人にはなおさらのことだったと思われる。

このやり場のない怒り、行政への不満は、時としてボランティアの若者たちへも向かってしまった。帰るべき生活の本拠を有する者を正義感にあふれる優しい人間として素直に受け入れることなどとてもできない、そんな感さえあった。それ程に、震災が被災者に与えた傷は深かった。被害の大小はあれ、災害ボランティアの現場に立つ人間は、こうした被災者の気持ちを理解しておくべきだろう。

◆一コラム

頭に来たボランティア 震災がつなく全国ネットワーク会議から その1

～こんなヤツは間違いなく嫌がられる!

1998年11月7日、とちぎボランティア情報ネットワーク事務所。ネットワークのメンバーが会議のために全国から集まっていた。石井事務局長が言った。「これからお渡しする紙に、ボランティアをされていて、こいつキライ!と思った人のことを書いてください」。途端に全員目がめらめらと燃え上がった…。

★仕切り屋編

◆自分の思いを押しつけるヤツ。◆回りの意見に耳を貸さず、自分の思いで物事を進め、突っ走りまくる人。◆子分を連れて、我がもの顔で命令して回るリーダー。(なんか勘違いしてんじゃない?)◆非常時だからと、新参のボランティアを頭から仕切りまくるヤツ。(エラそー

に)

★自己中心編

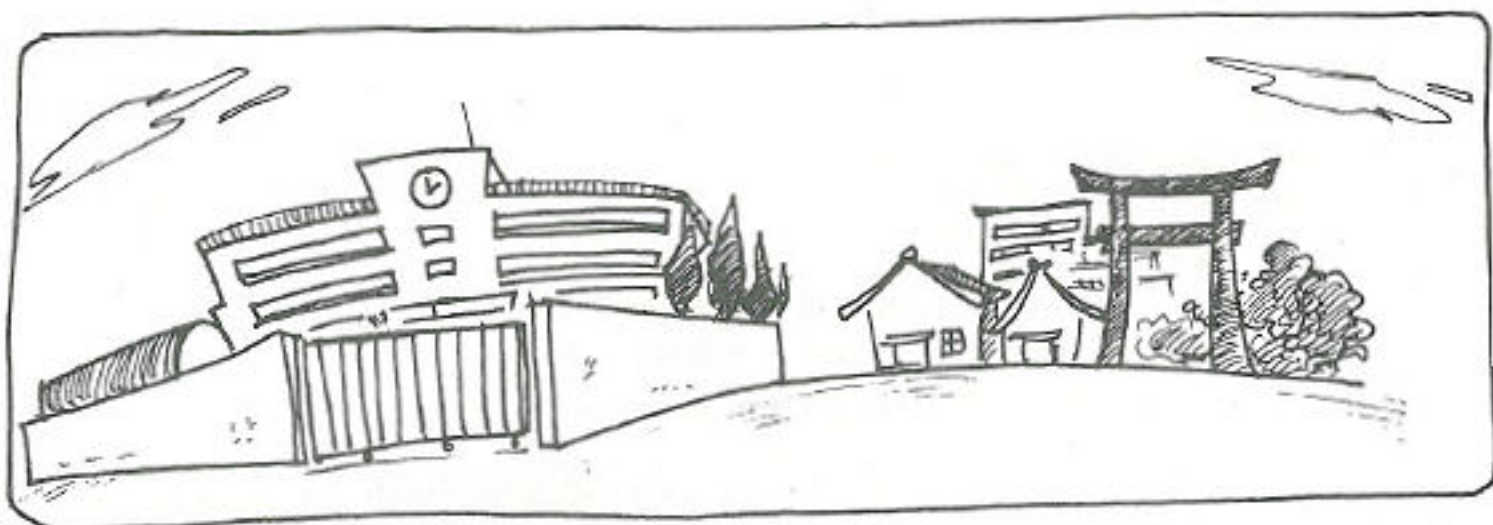
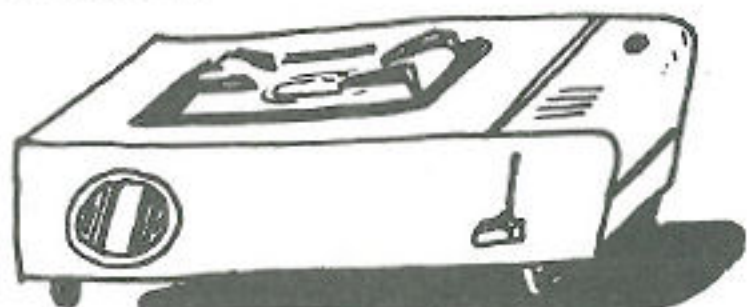
◆被災状況を知ってもらうための現場で、「こんな見て何になるの?」「私達は見学にきたのではない」と。(なに考えとんのじゃ!)◆“正論”一点張りで主張する人。◆「やめた」と言って途中で投げ出すヤツ。◆自分のやることや方法が正しいと思い込んで押し通そうとするヤツ。◆現状ではやっていない活動(炊き出しなど)をやりたがるボランティア。

★付録編

◆救援物資の中に誰がどう見ても使えないモノを入れて送ってくる人。

STORY 5 応えられないのか？

すべての被災者の思いは聞き入れられない。
マッキーは改めて知りました。



「そこを何とか、お願いできませんか」。避難所ボランティア4日目の夕方。炊き出しテントの横を通りかかったマッキーは、必死で訴える女性の声を聞いた。女性は地元婦人グループの代表で、避難所に入りたがらない人たちのために、町内の神社で炊き出しをしていた。使っていたコンロが壊れてしまったらしい。新しいのが届くまで、避難所のコンロを1台貸してほしい、と頼んでいた。「そういうことは本部で相談してください。私の一存では、どうにもできないんです。第一、こんなときに避難所が嫌なんて、わがままなんじゃないですか」。炊き出し担当のボランティアは言った。女性は悔しそうに、ボランティアの顔を見上げ

た。「余分に作っておくので、あとで取りに来てください」。そう告げられ、女性は黙って立ち去っていった。その晩、結局、女性は避難所に来なかった。



①●あなたがこのボランティアと同じ立場に置かれたら女性の訴えにどう対応しますか。

②●女性がお世話をしている人たちは、なぜ避難所に入りたがらないのでしょうか。

③●このときマッキーにできることがあったとすれば、どんなことだったと思いますか。



◆解説と提言

鬼東慶(震災から学ぶボランティアネットの会)

●震災当時は活動ができなかったのが悔しいと思っていたが、「震災から学ぶボランティアネットの会」に入会して1年、愛知県へ避難された方の神戸県省のお手伝いや、災害ボランティアコーディネーター講座などに参加している。

ボランティアとしての心構え

自分では答えようがない相談を受けることは、頻繁にあります。短期ボランティアで、しかも所属するグループに、機械的に担当を割り振られたケースではもちろんでしょう。しかし、「自分では分からないから」と杓子定規に門前払いする対応は、“人間対人間”の関係であるボランティアとしては、失格に近いものです。また、自分の担当の仕事を黙々とこなすだけでは、もちろんダメですが、「被災者のためになりたい」という思いで突っ走って、何でも安請け合いするのも、かえって混乱を招きます。

応えようがない相談は、毅然と断るべきですが、その場合でも、相手の思いを汲んで、「なぜ応えられないのか」について納得のいく説明をし、さらに相談を受け付けてくれる人や団体を紹介するなど、問題解決への努力が求められ

ます。

そのためには、自分の力量の限界を知っておく必要があるでしょう。自分が所属するグループは、どこまでの活動ができるのか。どんな物資を備えているのか、担当外の相談を受けた場合、誰に話を持っていけばいいのかなど、可能な限りの情報を把握しておけば、冷静な対応ができると思われま

す。現場の混乱の中では、なかなかスムーズな情報交換ができず、被災者のさまざまな要望に適切な対応ができないケースも少なくないでしょうが、自分の失敗談を同じボランティア仲間に伝え、話し合うことで、後を引き継ぐ人たちが、同じ轍を踏まないようにすることも、一つの義務と言えるでしょう。

◆一コラム

手塚信一(結～ふくおか～)

●被災地では、ちびく3救援グループで引越しの手伝いや仮設住宅の建て替えに出向いたり。

何とかなるだろうという気持ち、何とかしようという気持ち

2月中旬に町内で集めて頂いた救援物資を宝塚市の市役所に運んだ友人から聞いた話である。被災者と思わしき女性が、市の係の人に「水屋とタンスが欲しいんですが」とたずねた。係の方は忙しさのせいだろうか、「すみません。ありません」と答えたのみであった。横で聞いていた彼は詳しくお聞きした。「仮設住宅に当たって入居することになりました。コタツ、食器、布団、衣服は友人からもらったのですが、食器や衣服を入れる水屋とタンスがないのです。仮設住宅は狭いので、小さめの物が欲しいのですが……」。彼は、名古屋に帰って声をかければ水屋とタンスなら集められる自信があったので、「何とかしましょう」と答えた。運搬に大きな費用と

●地下に住む人々



労力を要するので、自分が働く前に大阪の友人たちに話したら、友人たちが喜んで解決してくれたという。

前向きな発想で考えれば、何とかなるものではないでしょうか。そうでなくても、特に緊急時は、遠隔地でも協力者が得られやすいのですから。



ふと漏らした婦人の本音に、マッキーは冷や水を浴びせられたような気になりました。

被災地に来て5日目の朝、避難所ばかりに救援の手が集中していると批判を受けて、周辺地域の調査チームが組まれた。「ボランティアさんて、気持ちがあえんやろね」。傾きかけた借家の一室で、年老いた婦人はポツリと言った。ガラスが割れ落ちた窓には、透明なビニールが画鋲でとめてあった。「あの窓も、元気のいいお兄ちゃんたちが、大勢来て、貼ってくれたんよ。ご飯いただきに行っても、いつもお嬢ちゃんたちがニコニコしてはってね…」と言いながら、マッキーにお茶をすすめてくれた。「こうして来ていただけるのはありがたいんやけど…」婦人は言葉をにこした。「どうかされましたか?」。マッキーはたずねた。「言葉も違いますし、いつも同じこと、話さなあかん。元気そうにしてたらがっかりさ

れる。ありがとう言うて、いろんな物いただくけど、被災者やったらもらうのが当たり前みたいにされると……、なんやねえ」



- ①この夫人の気持ちをあなたはどう思いますか。
- ②この婦人の目にボランティアとはどんな人間と映っているのだと思いますか。
- ③この婦人はボランティアにどのような接してもらいたいのだと思いますか。

◆解説と提言 神田裕(たかとり救援基地)

●カトリック廣取教会神父。いつもジーパン姿で首にタオルを掛け、ヒゲと眼鏡がトレードマークのおよそ神父らしくない(?)神父。「地震で教会の壁が崩れ、(一般の)人々との隔てがなくなった」と精力的に被災地内外を飛び回る毎日である。

視線を下げないで視点を下げる

震災後しばらくしてボランティアたちの中で、「被災者はわがままや」という言葉を時々聞くようになった。「自分でできることもせえへん」と文句を言ったり、「かえって自立心を妨げるんちゃうか」とぼやいていた人もいた。中には「ここに居ても意味がない」といってイヤな思いで去っていった人たちもいた。残念なことです。どうしてこんな言葉が出てくるんだろうか。

良く考えてみたら、何も被災者でなくても、生きてる人は誰でも「わがまま」なのは分かっていること。死んでいない証拠でもあるのに、普通の人として生きていてはいけないようですね。「ペット」とでも言うのでしょうか。「お手」をして「ワン」と応えなければ餌は貰えない。そういうふうにはひねくれてしまいそうです。

「被災者はかわいそうな人」。この言葉がすべてを見えなくする。「かわいそうな人」はこうでなければならぬと、見る視線を下げてしまう。これは「ボランティアのわがまま」。自立を妨げてしまうのは被災者のわがままだけではなくて、関わろうとしている側のわがまもある。「ボランティ

アもわがまま」。それが分かれば視点が下がる。

「わがままな被災者」と「わがままなボランティア」が対等になったとき、はじめて良い関係が生まれるのかもしれない。

●配給の列



◆一コラム 金田真須美(すたあと長田)

●長田区の公園で炊き出し、物資配布、放置ペットの工かけ、避難所廻りの安否確認や聞き取りなどをしてきた。

幻想の通行手形

震災で日常を失った私は、ある公園で次々と被災地に駆けつけるボランティア達と救援活動にかかわっていた。そんな一月のある夜、暖を取る為に大きな缶に穴を開けたくて適当な道具を借りようと、ボランティアで溢れる公園を尋ね回った。30分程して諦めかけた頃、焚き火を囲むグループを見つけ声をかけてみたが振り向いた10人程はいぶかしげに私を眺めるばかりだった。説明不足かと思い直し、改めて用向きを伝えると私の関西弁に気付いた若い男性が

進み出て私の事を被災者かと聞いた。何故の問いかけなのか理解できぬまま私がうなずくと、彼は「何だ、それを早く言ってよ!」とおもむろにサバイバルナイフを腰から外し、アッと云う間に缶に穴を開けてくれた。そして矢継ぎ早に我が家の倒壊状況やミウチの安否を慈愛に満ちた眼差しで問われたが、あのときの居心地の悪さは今も鮮明におぼえている。

マッキーは
生活支援ボランティアの
役割を自問しています。



「あのおばあちゃん、あたしじゃないとだめなんです」。7日目の夜のミーティングでお年寄りの世話係から人手の足りないレクリエーション係への変更を断ったその女子学生は言った。地震から3週間が過ぎ、避難所に暮らす人々の肉体的、精神的な疲れはピークに達していた。「気持ちはわかるけど、ずっとあなたがついていられるわけじゃないでしょう」誰かが言った。「あたしが行くと、とっても喜んでくれるんです。外出するのも、話をするのも、あたしが一番いいって言ってくれるんです。安心できるって」。「君が帰ってしまったあとどうするの、その人?」。「あたし、ずっとここにいます。おばあちゃんが落ち着くまでずっとついていてあげます」。「だって学校があるんじゃない?」。「休学します。勉強はいつだってできます。でも、あのおばあちゃんは今あたしを必要としているんです」

……。どこかがまちがっていると思う一方で、彼女の言うとおりのかもしれないとマッキーは思った。



- ①●あなたはこの女子学生が係の変更を断ったことをどう思いますか。
②●あなたはこの女子学生はどうすればいいと思いますか。
③●このおばあちゃんには、どんなお世話をしてあげるのがよいと思いますか。



◆解説と提言

岡田阿礼(防災ギャザリング'99 from
かながわ実行委員会/事務局長)
●緊急救援時、救援活動グループDENNENにて
西宮市内を中心に東奔西走。

相手の言いたいことは本当にこのこと?

ボランティアとして関わる以上、自分の「してあげたい」という気持ちも大切にしながら、同時に本当にその相手の方が「何を」「どのくらい」困っていらっしゃるのかを見抜いてゆく努力はしなければならないと思います。

例えば、このストーリーに登場するおばちゃんには、家族の方はいらっしゃるのでしょうか。おられるとしたら近くに住んでいるのか、遠く離れているのか、また体調が良いのか、それは震災前から持っている持病なのか。かかりつけの医師、ヘルパーさんや担当の民生委員はいるのか? 市や区の福祉課の職員さんはこの人のことを知っているのでしょうか。

もしかすると、ボランティアに専門的知識や洞察力がないばかりに、「気持ちが落ちれば大丈夫」となんとなく思ってしまったけれど、本当はもっと大変な状況をかかえていらっしゃる、それが「あなたがいないとだめ」とい

う心の状態をつくり出しているのかもしれない。一見大丈夫そうに見えても、一刻も早くご家族やお医者さんに連絡をとらなければならない時だってありますよね。

その人の不安に気づいているのがあなただけかどうかを確認し、あなたが帰る前になるべく沢山の周囲の人、後任のボランティアにそれを伝えるべきでしょう。そしてそのうえで、どんな支援がそのおばあちゃんに適切なのか、検討しながら対応することが望ましいと思います。

そして「あんたが一番安心できる」と言われても、その言葉だけに振り回されない方がいいかもしれないですね。逆に、「ボランティア嫌いや。何も必要ないから帰れ」と言っている人が、本当に何がしらかのサポートが必要なこともある。ムードにまどわされそうなときは、「この人の言いたいことは本当にこのこと?」と立ち止まってみることをおすすめします。

◆一コラム

清淵裕子(被災地障害者センター)

●1995年4月より被災地でのボランティア活動に参加。被災地障害者センターの専従スタッフとして、現在に至るまでコーディネートやイベント、障害者の介助を担当している。

「頼る」「頼られる」とは違う

地震がおきて「震災ボランティア」として神戸に来た。そこで初めて障害者とまともに出会った。障害者と外に出たり、少し話をするだけで、知らなかったことがぞろぞろと出てきて、もっと知りたい気持ちから早3年が過ぎた。一人の障害者からのニーズは掘り下げれば下げるほど数限りなくある。精神障害を持つK君。やっとの事で一人で行けるようになった作業所や学校への道。が、震災でいつも乗っていた電車が崩れ、振り出しに戻ってしまった。そして送迎の依頼を受け、関わるようになった。次々と知らないボランティアが迎えに来る。交通手段が変わった混乱と、知らない人と一緒に行く

ことへの不安。彼はそれを言葉ではなく、奇声やものを投げることで表した。といっても、今ふり返ればそう思えるが、その頃はボランティアも必死で、なぜ彼がそのような態度を示すのか、知る余裕も持ちえていなかった。しかししだいに回を重ねるごとにK君自身が少しずつ見えてきた。またK君を通じて社会の障害者に対するあり様までも見えてきたのだった。こうして目の前に広がる課題を、私たちは当事者を中心としたチームづくりをして、話し合いを重ね、取り組んでいくことにしたのだ。そして今、障害者と「頼る」「頼られる」でない、一緒につくっていく関係が大事だと実感している。

「マッキーは『してもらいたいこと』と『してあげられること』の差を痛感したようです。」



「被災者の中にも、礼儀知らずの人はいるんですね」。ボランティア休暇を取って、ひとりで来たという青年が、しみじみと言った。マッキーが理由をたずねると、「実は」と切り出した。昼間の出来事という。青年は、避難所の近くの小さな子どもがいる家を訪ねた。子供の声が迷惑になる、と遠慮して、危険な自宅に暮らし続けている家族だった。その家の主婦が、「蒸かし器があったら貸してくれませんか」と言った。あいにく、救援物資には蒸かし器も炊飯器もなかった。そこで青年は、配給の残りの弁当とお菓子を届けた。主婦は、「こんなものをもらっても仕方ありません」と言って、受け取ろうとしなかった。相手は被災者だからと、できるだけやさしく「せっかく持ってきたものだから」と言った。青年の言葉に、主婦は台所から袋に入ったもち米とを持ってきた。長女の足早い卒園祝いに、赤飯を炊くつもりだったらしい、と説明した。「お菓子だけはもらってくれ

ましたけど、ありがとうの一言もないんです」。青年はフツとため息をついた。



- ①●なぜ主婦は青年に対してこのような態度を取ったのでしょうか。
 ②●青年はどうすればよかったのでしょうか。
 ③●あなたがマッキーだったら、青年に何と書いてあげますか。



◆解説と提言

山田光(震災がつなぐ全国ネットワーク)

●震災当初は六甲小学校避難所(神戸市灘区)ボランティアとして活動。その後95年8月より阪神大震災地元NGO救援連絡会議・仮設住宅支援連絡会スタッフ。97年9月退職。現在は愛知県で個人的に活動中。

「ありがとう」はなくても前向きに!

ボランティア活動をしていると、本当に様々な要望が押し寄せてきます。すぐに応えられるようなものから、どうしたらいいのか全く検討がつかない要望、はたまた「こうしてくれ」「いや、しないでくれ」といった、全く正反対の要望が同時に来たり。そして、それが、また応えることのできない要望だったら……。

この章では、せっかく渡そうとしたお弁当を気持ちよく受け取らない被災者と出会ったボランティアの例が挙げられています。個人ボランティアの場合は、まず様々な要望に対して、一度その人の気持ちを受け止めたうえで、できるだけ相手の状況を把握し、どうすればよいのかを話し合い、最善を尽くすことが必要になって

くるように思われます。そして、それがもし応えてあげることのできないことならば、なぜ、応えられないか、きちんと相手に伝える作業を忘れてはいけないうのでしょう。

特に、緊急時の支援では「ありがとう」と言わない被災者の現状を否定的に受け止めると、話が前へ進みにくくなりがちです。「せっかくあげようと思ったのに…」という気持ちを、落ち込みや怒りの材料にするのではなく、「(被災者が)なぜ、必要ないと思ったのか」「本当に必要なものは何か」「それは調達可能か?」…という話し合いを進めるチャンスととらえ、前向きに取り組んで行く姿勢が望まれます。

●お湯の吹き出し部隊

◆一コラム

緊急救援グループDENNEN(メンバーの声から)●西宮市を中心に、「日常生活の支持」を視点に細やかな救援活動を展開。「プロジェクト結ぶ」に発展し、現在も様々な生活支援活動を続ける。

本当に必要なものを

「ひえせんべいが欲しいって言ったじゃないですか!!」。アトピーの子供を持つお母さんの多少激しい対応に学生ボランティアさんがびっくり…。そんなこんな報告がいくつも残っています。特殊な食物しか食べられないアトピーの子供たちにとって、震災直後の被災地の混乱は大きなダメージでした。

アトピー相談窓口を開設していた私たちのグループは、全国から寄せられたアトピー支援物資の受入れ先にもなり、保健所や行政機関とも連携・協力しながら、支援物資を提供しました。ボランティアさんの中には、アトピーについて全く知識のない人も多く、細かい成分の差がわからないまま、身近にあった物資を持っていってしまうことも度々でした。被災者の方



ら注意を受けた時、「こんな時なんだから、わがまま言うな」とか、「だったら被災地を出ていけばいい」という気持ちがつい態度に出てしまった。そんなボランティアさんに対する苦情が窓口にも何度か入りました。

また、全国から物資を提供して下さる方の説明の長いこと。「今は緊急時ですので、手短かに…」などと言おうものなら、食ってかかってこられる方もいらっしゃいました。

「相手の立場や状況を考え、おたがいに配慮をしながら、本当に必要なものに被災者ご本人が近づいていくための活動であること」。アトピーの場合だけでなく、様々な場面で検討し続けることが大切だと思いました。

「非常時だからこそ、思いやりを大切にしたい」
マッキーは考えさせられました。



「そのおばあちゃん、ほんとうは手鏡とかが一番欲しいって、小声で言ったんです。すごいショックでした」。8日目の夜のミーティングで、週末のたびに避難所を訪れているという若い女性が言った。「どうして」の問いかけに、「避難している人に必要なものをたずねるときに、食事や、周りの人たちのこと、これからの生活のことも聞くようにしてたんです。すぐには解決できなくても、大切だと思ってたから。でも、おばあちゃんに手鏡が欲しいと言われて、自分が被災した人の立場になっていなかったって気付いたんです」。彼女は胸の内を話し続けた。「おばあちゃんは、『こんなときにぜひくださいよね』と言うけど、そんなことはないですよ。お化粧はできなくても、せめて髪だけはきちんとして

おきたい。そんなことにも気付かなかった……」。皆、だまって彼女の話を聞いていた。



①●この女性はなぜ必要なモノ以外のことを聞くことも大切だと考えているのでしょうか。

②●彼女が言うように被災した人の立場に立つと何が見えてくるのでしょうか。

③●この避難所ではこれからのどのような配慮をするとよいと思いますか。

◆解説と提言

和田稔邦(阪神・淡路コミュニティ基金)

●1995年3月より神戸市中央区役所を拠点にボランティア活動に参加。その後神戸市中央区社会福祉協議会により新たに設立された中央区ボランティアセンターのボランティアコーディネーターとして約1年間勤務。1996年7月より現職。

相手を当たり前前に尊重する

やはり、支援「される側」はつらいもの。そこを思いやり「言うに言えない悩みを」察してあげたい。ただ、「思いやりと想像力」の乏しい私は、話だけを聞くことに努めた。そんな時、何か役に立ちたいとの思いが先行し、話を聞き出そうとして、かえって相手に不愉快な思いをさせてしまっていたのではないかと思う。これでは誰のための手助けか分からない。相手を尊重して話をしてくれるまでじっくり待つ。それまでこちらは、必要があれば話をしてくれる関係を築くことを心がけたい。

先のストーリーでも何度も同じ方のところに通い信頼関係ができていたからこそ「言えなかった思い」が開けたのでは。時には要望を先取りして迅速に動くことが大きな成果を上げるかもしれないが、基本的には何が必要とされているかをじっくり聞く。「ボランティアができることはしれている。あせらず短い活動の中で

何か一つでも役立てれば幸運」ぐらいの気持ちでもよいのでは。

「災害時にも相手を尊重する」当たり前の話だが、私は時として被災者=援助を必要とする人という枠に当てはめてしまっていたように思う。そこには、「勝手な思いこみ」「やり過ぎ」「大きなお世話」が生まれてしまう。自分が被災して支援される側に回った時、どんな事をして欲しいか、また、して欲しくないかを想像して救援活動に望みたい。そうしないと、かえって相手の尊厳を傷つけてしまうのではないかと思う。自戒を込めて。



●震災の爪跡は港へも

◆一コラム

田中康夫(作家)

●震災4日後から約4ヶ月間、きめこまかな現場主義の視点で、小さな避難所から路地裏まで50ccのバイクで救援物資を手渡して配った「一人赤十字」。著書「神戸震災日記」(新潮文庫)からの引用を快諾していただいた。

ゲンチャリにまたがって

僕は、PRを担当するいくつかの外資系化粧品会社の女性に電話をした。

「口紅とか、少しだけでも提供してもらえないかな」と。「ふうん、偉いですねえ」と冷淡な口調の企業もあった。「既に義援金の形で送ってしまったので」と婉曲に断られてしまう場合もあった。そうした中、シャネルとランコムが2社の担当者が反応を示してくれた。「神戸には私達のお客様も沢山、いらっしゃるわ。でも、それ以前に一人の女性として、口紅を塗ることも化粧水を付けることもままならない辛さを何とかしてあげたいの。私達のお客様であるかどうかに関係なく。ねえ、是非、検討させてくださらない?」。頼もしい言葉だっ

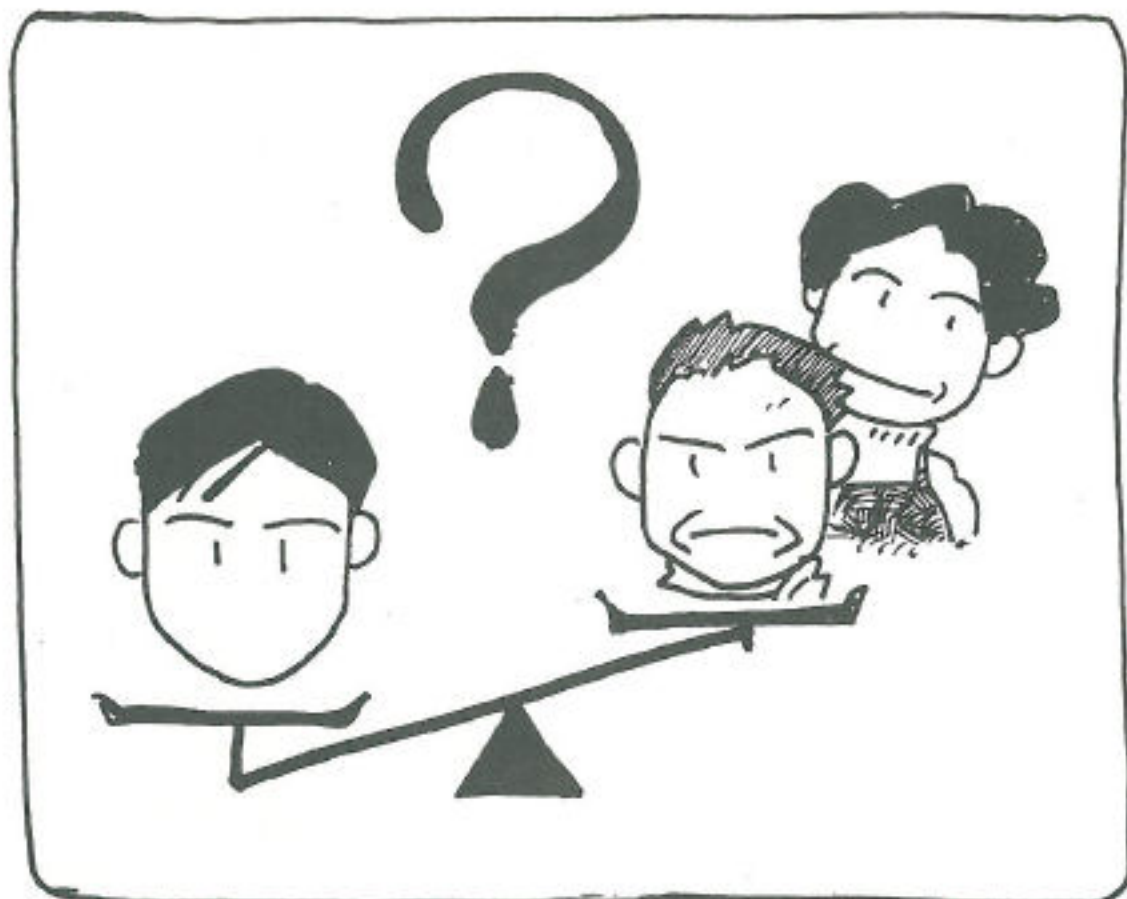
た。(中略)ぼくは期待した。が、数日後、電話をすると落ち込んでいるではないか。

「お話を聞いて、全社的に盛り上がったの。田中さんを通じて、是非、神戸の人達のお役に立とうって。でも、税金の問題で暗礁に乗り上げてしまっ……」。

税金? 一体、何の話した。僕にはサッパリ理解できなかった。詳しい説明を求めた。

※このあと、田中さんは紆余曲折を経て、無事、両社から膨大な量の化粧品の提供を受け、被災地の女性たちに届けた。詳しいいきさつは「神戸震災日記」に。災害ボランティア必読の1冊。

自分探しのための
ボランティアだったのではないか……。
眠れぬ夜をマッキーは過ぐします。



「正直言います、ボランティアさんには困っとるんですわ」。自治会長は言った。マッキーたちの避難所では、週に一度、避難所と周辺の自治会、ボランティア側のリーダーが連絡会議を開いていた。苦情は、マッキーがリーダー役を務めるボランティアの若者たちに向けられていた。「ほんの一部の人やと思うんですけど」と前置きして、自治会長は実状を話し始めた。まず、長続きしない。単純な作業が二日も続くと、あからさまにやる気をなくす。かわいそうな人、大変な人の手伝いばかりしたがる。できないことを請け負う。触れられたくないことまで、根ほり葉ほり聞こうとする。「ただでやってもろうて、言えた義理やないんですけど、自分がどれだけ特別なことをしとるか、なんや生きてる実感ちゅうんですか、自分の価値を追求するちゅうんですか、私らのことより、そのほうが大切なんと違えますか」。茶をすすりながら、そうこぼした。マッキーは毎夜

のミーティングで熱く人生を語り合う若者の姿を思い起こしていた。ひよつとすると、自分もそうかも……。避難所最後の夜、マッキーは寝付けなかった。



- ①●自治会長の言うような状況に
ならないためには、どうすればよい
と思いますか。
②●今している作業が自分に合わ
ない、続けるのがつらいと思った
とき、あなたならどうしますか。
③●なぜ被災地でボランティアを
すると“生きてる実感”を感じられ
るのだと思いますか。

◆解説と提言

山本亜紀子(結〜ふくおか〜)

●震災当時は「ちびくろ救護くるっぽ」で西神第七仮設住宅、須佐野仮設住宅への「仮設訪問」を中心に活動し、地元福岡県で「結〜ふくおか〜」を結成。

なにがしたいか?の前に、 なにが必要とされているか?

なぜ、災害ボランティアという活動が自分探しにつながるのかといえば、災害という非日常の中で、現在の生活の中ではなかなか表れにくくなっている、人間の本質やさまざまな側面が露出するという状況が生まれたからではないかと思います。私自身も、そういった状況の中で、自然に人と人とのふれあいや助け合いが生まれたのを目の当たりにして、とても感激したことを思い出します。逆に考えれば、今の日本の日常の中では、それだけ人間関係が希薄になっているということがいえるのではないのでしょうか。それゆえに、そんな非日常の中で、ボランティア自身が自分探しに一生懸命になってしまうのは当然のことといえるのかもしれませんが。

たしかに、ボランティアというのは、本来自発的意志で行うものであるということを考えれば、自分の想いと実際にやっていることにあまりにもギャップがあれば、それは本当の意味でのボランティアといえるのかな、という疑問を感じてしま

います。しかし、その一方で自由意志であるだけに、それだけ個々人の責任が問われるものであるということを忘れてはならないと思います。

ボランティアをしようと考えたのであれば、まず自分が何をしたいのか?という前に、必要とされていることに対して自分が何ができるのか?ということを考える姿勢が大切であるといえます。そんなふうに相手の立場に立って考えようとするのが、結局は自分自身というものを見つけていくことにつながっていくのではないのでしょうか。



●段ボールの仕切り

◆一コラム

吉岡文雄(シャンティ国際ボランティア会)

●地震直後に日本人とベトナム人が共に避難した長田区の南駒栄公園テント村や、SVAの神戸事務所にて活動。現在は「いつ?まだやっているの神戸?」で検証、データ集の刊行を行っている。

被災者からの感謝と?...

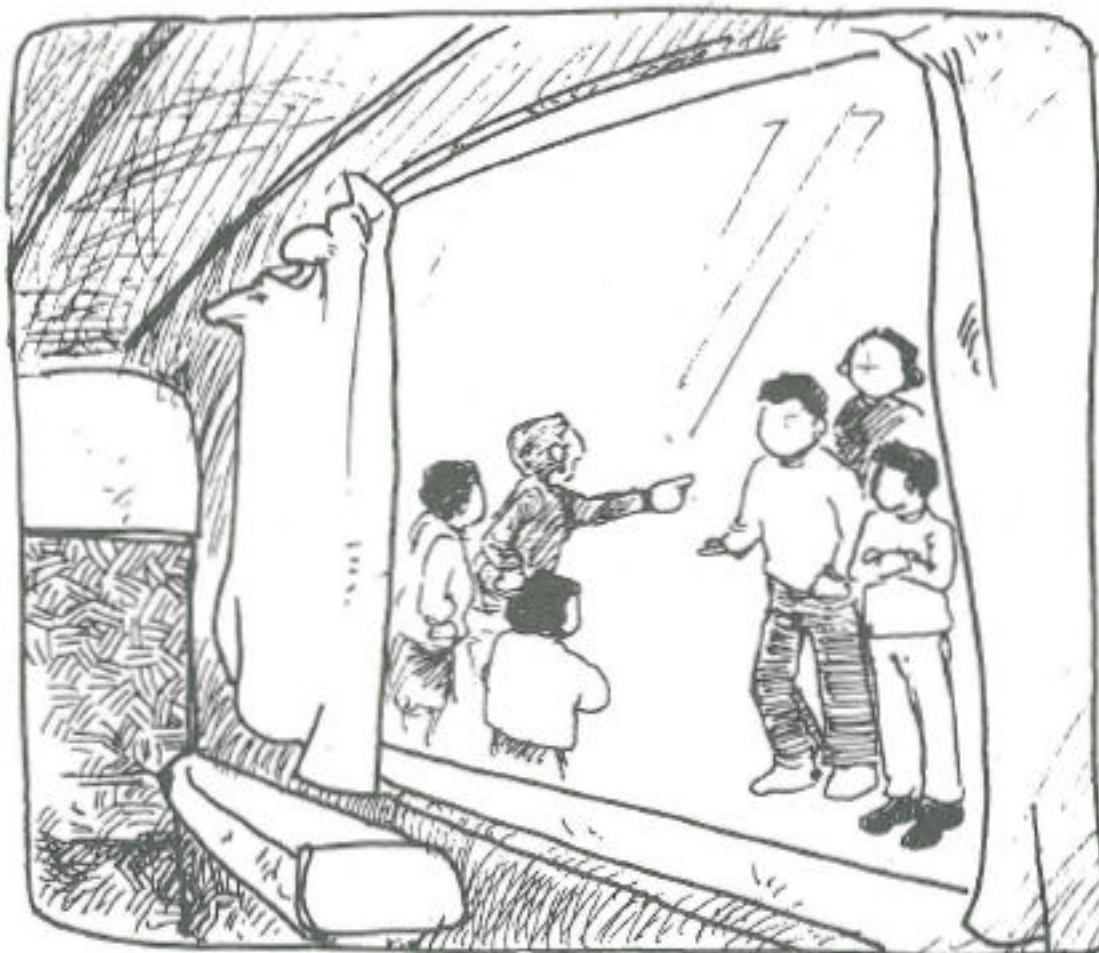
震災から2年後のある日、親しい被災者の人たちと神戸で話していたら、こんなことを言われた。「あのときは自分のことだけで精一杯で、ましてやボランティアの人たちのことなど考える余裕などなかった。でも、なぜあんなに多くの人たちが来たのだろうか。もし万一“被災地を物見がてらに来た”という人がなかにいたのなら、みんなの不幸な状況を見て、何が楽しかったのかね…。でも本当にありがたかったよ」

思わずドキッとせずにはいられなかった。神戸に来たボランティアの多くは、何かの力になりたいという想いとともにかれ少なかれ、実は「見

たい」という気持ちも抱いてきたのではないだろうか。そして、「神戸の外の傍観者」という表現があるが、神戸に来た人たちも体を動かしながら神戸で傍観していたのではないか。

ただ、私たちは実際に自発的に動くことによって、初めてそれを認識することができた。ボランティアは自分の行動が被災者、被災地にとって本当に必要なものかどうか、責任をどれほど持てるのか、自己満足にすぎないのではないか、常に自己点検しなければならない。今後の社会に参画し、そして今後も被災者、被災地を思いやり、支援を続ける上で、重要な視点を得たように思う。

本当に被災した人たちの役に立てたのだろうか……
 帰途についたマッキーの胸中に
 満足感はありませんでした。



「ですから、ご自分たちのことはできるだけご自分たちでお願いしたいんです」。興奮した声が校庭に響きわたった。被災地10日目の朝、新しいリーダーに引継ぎを終えたマッキーは校庭の隅で一緒に帰る人たちが集まるのを待っていた。「わたしたちのために何でもしてくれるのがボランティアじゃないんですか」。激しい口調で応酬する声があった。校庭のトイレ前で数人のボランティアと被災者のグループがにらみ合っていた。街の復旧とともに、被災者もそろそろ自立を取り戻さなければならない、と避難所自治会とボランティア側の合意で、この日の朝から、トイレなどの共用施設の掃除は被災者が当番でやることになっていたのだった。「出発しますよ」バスの運転手がマッキーに声をかけた。マッキーは後ろ髪を引かれる思いでバスに乗り込んだ。校庭ではにらみ合いが続いていた。マッキー

は見送りの人たちに手を振ると、そっと窓のカーテンを引いた。



- ①●トイレの前でにらみ合っている人たちはどうしたらよいと思いますか。
 ②●あなたは被災者の自立とはどういつことだと思いますか。
 ③●窓のカーテンを引いたマッキーに何か言葉をかけてあげるとしたら、あなたは何と書いてあげますか。



◆対談

細川裕子(被災地NGO協働センター)

●95年4月より阪神大震災地元NGO救援連絡会議のスタッフとして活動を開始して以来、被災地での活動に携わっている。現・被災地NGO協働センタースタッフ。

鈴木隆太(被災地NGO協働センター)

●95年、難区の避難所にボランティアとして入り、その後8月より被災地NGO協働センターの前身となる「仮設住宅支援連絡会」にスタッフとして活動を開始。現在も被災地で活動を続けている。

●仮設住宅の抽選発表

自立とは…

細川●早いもので、震災から4年近くが過ぎました。たしか、地震の年の頃だったと思うのですが、「被災者の自立」の問題が大きく取り上げられていた時期がありましたね。

鈴木●ええ。「いつまでもボランティア頼りではいけない」という声は私のいた避難所でもよく耳にしました。

細川●そこにいた人たちは、それをどんなふうに見受け止めてらしたんですか。

鈴木●「自分だけの力でやっていく」と文字通りに受け止めていました。ですから、仕事や蓄えのあった人には気を引き締めて立ち直っていくいい機会だったかもしれませんが、何もかも失ってしまった人には、しんどいというか、自立したくてもどうしようもないという感じだったようです。

細川●「身の回りのできることから」というふうには取らなかったのでしょうか。

鈴木●たしかに、支援をしてくれていた方の多くはそうした言い方で、段階的な自立を促してくれていました。しかし、私たちはそういった日常的なことも含めて、震災前は自立をしていたわけですから、自立と言われれば「すべて自分で」と考える。とまどいや反発もそこから生まれていたような気がします。

細川●あえてここで、被災地を内と外とに分けるならば、内側にいる人間、つまり被災者の方と外側にいるボランティアの「自立」の捉え方が違っていたということですね。

鈴木●そうです。自立というのは、あくまでも当事者個人のことなんです。100人の被災者がいれば100通りの自立の時期と、その方法がある。たしかに、ボランティアに依存しすぎて自分では何もしようとしなくなった人もいますが、そうってしまったのは個人の問題であって、被災者全体



の問題ではなかったのです。

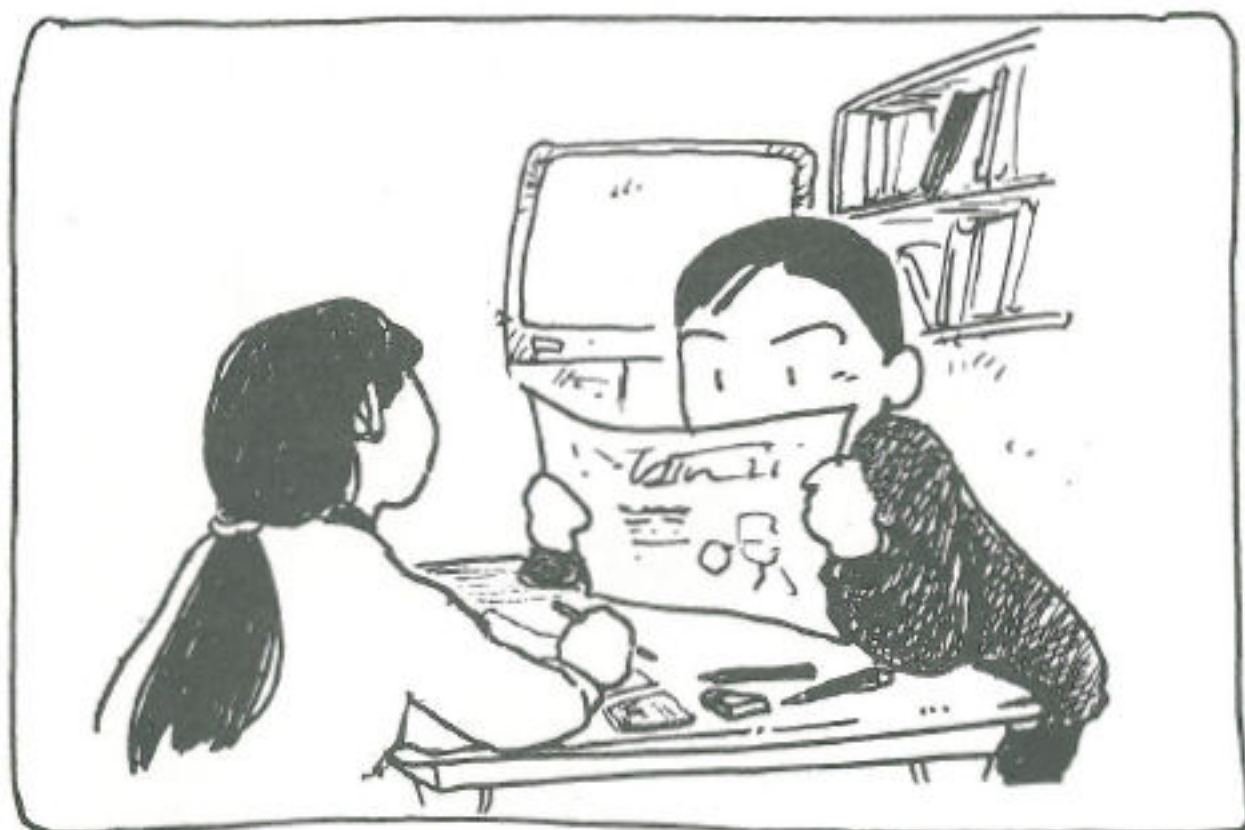
細川●ところが実際には、避難所からボランティアが撤退するために「被災者」というひとくくりにして、「自立の時期」ということで一斉に動かそうとした現実がありました。

鈴木●もちろん、悪気があってそうしたのではなかったでしょうし、大半の人は「そろそろ自立を考えましょうよ」と言えば、被災者の方々が気持ちを切り替えて生活再建への新しい一歩を踏み出せると思っていたのでしょうか。しかし、現実にはそれぞれの「時期」というものがあって、そこにかみ合わない人も大勢いたのです。

細川●とすると、この避難所での経験をふまえて、今後またどこかで大きな災害が起きたとき、「被災者の自立」に支援する側の人間はどのように取り組んだらよいとお考えですか。

鈴木●いろいろな方法や考え方があると思いますが、まず「自立とは、自分一人の力でやっていくことではない」ということを認識することでしょう。その様な認識に立った上で相手を認め、お互いが助け合っていくことが自立への道筋なのではないでしょうか。私たちは震災によって「人間はひとりでは生きていけない」ということを痛感しましたからね。一方的にどちらかが支えて、もう片方が支えられるという形ではなく、お互いがお互いを支え合うということではないでしょうか。

被災地で知った
ボランティアという生き方が
マッキーの人生を変えたようです。



「よし、できた。ちょっと見てくれないか」マッキーはテーブルの向かい側で電卓を叩く妻に声をかけた。避難所から戻って2週間が過ぎていた。今、マッキーは妻と二人で地元のボランティア派遣団体の手伝いをしている。お金もボランティアもまだまだ不足していた。差し出したのは、派遣ボランティアのオリエンテーション用の資料だった。帰ってからはしばらくは何をする気にもなれなかった。達成感よりは、無力感のほうが強かったのだ。震災は遠い場所の見知らぬ人々に起こった出来事と考える周囲と、どうしても他人事と思えない自分とのギャップも大きかった。そこへ電話がかかってきた。被災地での経験をこれから行く人たちに話してほしいという要請だった。使命感に胸を膨らませた人たちを前に、マッキーは自分が見てきた被災地とボランティアの現実を語った。災害ボランティアのよさも、きびしさもすべて理解した上で参加して欲しかったのだ。数日後、また頼みたい、できればスタッフとして関わってもらいたいと連絡があった。マッ

キーは妻と二人で支援活動に加わることにした。どこまでできるかわからないが、支援の輪を広めたいと思っている。



- ①●マッキーが支援の輪を広めるには誰にどんな働きかけをすればよいと思いますか。
②●明日、あなたの住む地域で大地震が発生したとしたら、あなたは何をしますか。
③●明日、あなたの住む地域から離れた場所で大地震が発生したとしたら、あなたは何をしますか。



◆解説と提言

矢野正広(とちぎボランティアネットワーク/常務理事)

●95年1月23日「阪神の復興を願う・とちぎ人ネットワーク」を結成し、95年5月まで栃木から市民ボランティアを募り、須磨区鷹取中学校避難所に派遣。12月1日に市民によるボランティアセンター「とちぎボランティア情報ネットワーク」に発展。その後、名称変更。

ボランティアと想像力

私は結局ボランティアに行っただけで何ができたのだろう。私の活動は効果があったのか、とても手に追えなかったのか……そう自問自答することはとても大切なことです。結果、その活動からあなたが「身を引いても」です。しかし一方で「そんな非力な私があんな現場でできたことは何だろう」と自問し、「これから私には何が出来るだろう」と再出発することも大切です。

テーマが大きく、複雑で、未来永劫解決できそうにない問題ほど私たちにとって重要な事柄のはずです。えてして、そうしたテーマは「政治家や役所や国に任せておけば」と考えがちです。しかし、今回ボランティア活動をしてあなたが学んだことは「私一人が行動すれば、一つのことだけは変わる」という単純な事実ではないでしょうか。

現場での活動は、相手の要望を察知するために頭をフルに働かせ、この人に何をすればいいのかと相手の身になって想像力を働かせていました。他人の「痛み」をあなたが引き受け、分かち合った貴重な経験です。

これと同じような想像力を「未来」の方向に向けてみてください。例えば、あの人はこれからど

のような人生を歩むのだろうか、あの地域はどうやって生活の再建をするのだろうか…。また想像力を「身の回り」に向けてください。例えば、現場で出合ったお年寄りや障害者など社会的弱者は、同じ状況の人が自分の地元にもいるのではないかと…。さらに想像力を「ボランティア」に向けてください。現場に行くだけがボランティアではないのではないだろうか、現場でボランティアをコーディネート(*1)するのもボランティアだったな。地元でお金や物資を提供し応援していた人もいたよな……。

これからの活動はあなたの「気づき」の中に隠れています。行動を起こせば「一つは」世の中が良くなります。

(*1) 物事がうまくいくようによく調整すること。



●被災地外の活動。栃木で瓦礫を展示

◆一コラム

滝川裕康(震災から学ぶボランティアネットの会/代表補佐)

●震災時には地元町内会で救援物資を収集し、トラック一台分を宝塚市へ届けた。

出会いが人の輪を大きくした

何度も準備会を経て、震災からちょうど半年後の95年7月17日にネットワーク組織として誕生したのが「震災から学ぶボランティアネットの会」である。高校生、大学生、会社員、自営業者、主婦など、色々な層と年代の方々が相集った。

会の目的を、①阪神・淡路大震災における被災者支援の継続、②地元ボランティアの交流と

実践、③今後の緊急時における積極的な行動の3点に絞った。これがそれからの私たちの活動を示す実に妙なる指針となっているのである。

KOBEとの関わりを大切にし教訓を学ぶ中で、多くの人々から親しまれることが大切であると知らされ、地元のボランティア団体とも日常的に馴染みになってきた。今後もさわやかに活動の輪を広げていきたい。